



口絵 5 褐色絹裳 正倉院宝物 南倉97 第1号 (63頁に図版解説)



口絵 6 綾縹緋間縫裳 正倉院宝物 南倉97 第5号 (63頁に図版解説)

紅の赤裳とは何か

上野 誠

立っていても思い浮かぶよ……

座っていても思い浮かぶよ……

紅の赤裳をさあ 裾引かせて去っていった

あの娘の姿がね——

〔『万葉集』卷十一の二五五〇の釈義〕

はじめに

どんなネクタイをしようか。

今の口紅は赤すぎないか、アイシャドーの色は濃すぎないか。私たちは、日々色に迷う。それは、色というものにも社会的役割があり、社会的な記号として、我々は常に特定の情報を送受信しつづけているからだ。じつは、文学作品に登場する色も、社会的、文化的慣習に依存した記号としての側面を利用しているのである。中学生の時、私はどうしても、それまでの自分と決別したくて、赤いセーターを買った。その折、母が詠んだのが「わが殻を破りたき日のセーター赤」（上野繁子『日々新たなる』天満書房、一九九七年）という俳句である。この場合の赤は、自分の殻を破る決意を表する色ということになる。色、この不可解なるもの——。私が、これから述べるこ

とは、万葉歌に表れた赤、それも裳と呼ばれる巻きスカートの色についてである。

「あか」と「くれなる」

物によって色を説明する茶色とか、緑色に対して、色そのものを表す日本語は、案外少ない。上代語の色彩語は、赤（あかし）／黒（くろし）／白（しろし）／青（あをし）の四つしかない。「あか」は、もともと光量を表す言葉であった。朝、明るくなる時は「あかとき」であり、これが転じて「あかつき」となったのである。「あかつき」とは、明るくなる時、という意味なのである。

では、同じく「あか」の一種である「くれなる」は、どうか。こちらは、もともと染料として使われていた藍に対して、呉の国からやって来た藍という意味であった。ここで、上代語の代表的な辞典を引用しておく、

くれなる「紅」（名）①べにばな。スエツムハナとも。きく科の越年生草本で、葉・花ともにあざみによく似ている。夏、茎の頭に管状花からなる紅色または黄紅色の花が咲くが、それを摘んで臙脂（べに）を作り、また紅染の染料をとった。呉の国から渡来し

た藍（染料）の意のクレノアキの約。

〔「くれなゐ」上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典（上代編）』三省堂、一九八五年、初版一九六七年〕

ということになる。「紅の赤裳」とは、同じ赤でも舶来の「べにばな」で染めた赤色の裳をいうことになる。

赤色の裳

以上のように、「あか」と「くれなゐ」の色を整理して、万葉歌の「赤裳」を見てゆこう。

一〇〇一 ますらをは み狩に立たし 娘子らは 赤裳裾引く
清き浜辺を

右の一首、山部宿禰赤人が作。

（巻六）

一二七四 住吉の 出見の浜の 柴刈りそね 娘子らが
赤裳の裾の 濡れて行かむ見む

（巻七）

二七八六 山吹の にほへる妹が はねず色の 赤裳の姿
夢に見えつつ

（巻十二）

一〇〇一番歌は、難波行幸歌の一首で、行幸の一齣、それも一瞬を捉えた歌である。立派な男たるますらをたちは、狩りに出で立ち、娘子らは浜遊びに興じるというのだ。男と女、狩りと浜遊びで行幸の場全体を一首の内に包み込んだ歌といえるだろう。一二七四番歌は、娘子たちの赤裳の裾が濡れる、その姿を見たいから、柴を刈らないでおくれと歌っている。この男は、柴に隠れて赤裳の娘子たち

を見たいと歌っているのである。二七八六番歌は、黄色に輝く山吹のように、その美しさがほとばしる恋人のはねず色の赤裳の姿が夢に見える、と歌うのである。「はねず」は、『日本書紀』天武十四年（六八五）の朝廷出仕服の規定に「朱華」とあり、その訓注には「波泥孺」とある。「くれなゐ」同様赤色の染料に用いられる植物なのである。つまり、夢に出るほど、赤裳を纏った恋人を見たいといっているのだ。三首に共通するのは、それが若い女性である「をとめ」の裳の色であり、男の見たいと思う姿を象徴的に表していたということである。水濡れる赤裳は色を増し、体に纏わりつく。女性の美しい体つきを鮮やかに映し出すのである。官能的な美の世界が映し出された万葉和歌だ。

紅の赤裳とは

『万葉集』には、「紅の赤裳」という表現が五例ほどある。冒頭に示した釈義は、

二五五〇 立ちて思ひ 居てもそ思ふ 紅の 赤裳裾引き
去にし姿を

（巻十二）

の釈義である。居ても立ってもいられないほどに、心に焼きついて離れない裳。では、それは、鮮やかな裳の美しさを讃えた歌かという、そんなことはあるまい。一首の力点は、赤裳をまとった女的美貌にあると見なくてはならないのである。つまり、紅の赤裳は、美女を表す記号のようなものである。

次に、高橋虫麻呂歌の紅の赤裳について見てみよう。

一七四二 河内の大橋を独り行く娘子を見る歌一首〔并せ

て短歌」

しなでる 片足羽川の さ丹塗りの 大橋の上ゆ
紅の 赤裳裾引き 山藍もち 摺れる衣着て ただ
ひとり い渡らす児は 若草の 夫かあるらむ 櫃
の 実の ひとりか寝らむ 問はまくの 欲しき我妹
が 家の知らなく (巻九)

虫麻呂は、丹で塗られた河内の大橋で、ひとりの女を見かける。その女は、紅の赤裳を裾引かせ、山藍の摺り衣を着て歩いてゆくのだ。心を奪われた虫麻呂は、夫はいるのだろうか、女はひとり身なのだろうか、と心を乱すのであった。しかし、問おうと思っても、その家がわからない、というのである。謎の美女というほかはない。どんなに読み込んでも、その美女の素性を知ることとはできない。しかし、歌とは元来、そういうものなのである。謎が謎であるところからこそ、一首の意味があるといつてよいだろう。歌のことが想像をかきたてるのである。無駄な詮索は、歌の世界を狭くするのである。

次に、山上憶良の紅の赤裳について見てみよう。

八〇四 世間の住み難きことを哀しむる歌一首〔并せて序〕

(序文省略)

世の中の すべなきものは 年月は 流るるごとし
取り続き 追ひ来るものは 百種に 迫め寄り来る
娘子らが 娘子さびすと 韓玉を 手本に巻かし
〔或はこの句あり、云はく、「白たへの 袖振り交
し 紅の 赤裳裾引き」 よち子らと 手携はり

て 遊びけむ 時の盛りを 留みかね 過ぐし遣り
つれ 蜷の腸 か黒き髪に いつの間か 霜の降り
けむ 紅のへに云ふ、「丹のほなす」 面の上に
いづくゆか 皺が来りしへに云ふ、「常なりし 笑
まひ眉引き 咲く花の うつろひにけり 世の中は
かくのみならし」…… (巻五)

山上憶良のいわゆる嘉摩三部作(巻五の八〇〇～八〇五)は、歌で人生が生きることの意味を問いかける作品であり、その意味で本邦最初のものである。生きてゆくということは、留め得ぬ時を生きたいうことであり、ゆえに生きることは「苦しみ」なのだ。憶良は説く時を留められる者など誰もいない。あるのは、老いと死だけだ。だから、生きることは哀しみなのだ。憶良はこの歌で説く。世の中の時の流れは、留め得ぬもの、すべなきもの。娘子たちが娘らしくあらうと、舶来の韓玉を手本に巻き、紅の赤裳を纏っている。しかし、私は、そんな娘子たちと甘美な夜を幾夜過ごしたというのか。黒かった髪も今や真つ白となり、どこからやって来たのか皺が私の顔上にはある、というのだ。「或はこの句あり」以下の部分は、山上憶良が同伴旅人に献上した初案であったと推定されている。後に憶良は、以下の句を削って選定し、決定稿を作ったのだ。この歌に出て来る韓玉は、手本に巻くブレスレットであり、「韓」は舶来のものを表す。この韓玉に初案で配されていたのが、紅の赤裳なのである。それは、当時としては女性が望み得る最高のおしゃれだったのであらう。

かくなる山上憶良の「世間の住み難きことを哀しむる歌一首」に触発されて作られたのが、同伴家持の次の歌である。

三九六九 更に贈る歌一首〔并せて短歌〕

(序文省略)

大君の 任^まけのまにまに しなざかる 越^こを治めに
出でて来し ますら我すら 世の中の 常しなけれ
ば うちなびき 床^{とこ}に臥^ふい伏し 痛^{いた}けくの 日に異^け
に増せば 悲しけく ここに思ひ出 いらなけく
そこに思ひ出 嘆くそら 安けなくに 思ふそら
苦しきものを あしひきの 山^へき隔^へりて 玉^{たま}梓^{はこ}の
道の遠けば 間使^{まつか}ひも 遣るよしもなみ 思ほしき
言も通はず たまきはる 命惜しけど せむすべの
たどきを知らに 隠^{こも}り居て 思ひ嘆かひ 慰むる
心はなしに 春花の 咲ける盛りに 思ふどち 手^た
折りかざさず 春の野の 繁^{さか}み飛^とび潜^{ひそ}く うぐひす
の 声^{こゑ}だに聞かず 娘^{をとめ}子^らが 春^{はる}菜^な摘^とますと 紅^{べに}の
赤裳^{せきしやう}の 裾^{すそ}の 春^{はる}雨^{あめ}に にほひづちて 通^{とほ}ふらむ
時の盛りを いたづらに 過^{すご}ぐし遣りつれ 慰^{なぐさ}はせ
る 君^{きみ}が心を 愛^うしみ この夜^よすがらに 眠^いも寝^ねず
に 今日もしめらに 恋^{こひ}ひつつそ居る

(卷十七)

赴任先で病に伏した大伴家持は、自らの人生について深く考えるようになっていた。ああ、三月というのに、私は、屋外に出ることができない。もし、屋外に出ることができたら、春花咲き乱れる野で若菜を摘む娘たちと遊び、春雨に濡れ通り色を増す娘たちの赤裳の裾を見ることができると、歌っている。病の家持を心配し、お見舞いの書簡を送った大伴池主に、こう述べて長歌は終わる。

私の心を愛おしんでくださるあなたの厚情を思うと、今宵も夜もすがら寝ることができず、昼はひねもす恋慕うばかりです。

(筆者が作成した釈義)

つまり、この家持歌の紅の赤裳の娘子は、家持の空想世界のなかにいる娘子なのだ。この家持の長歌に、盟友、大伴池主が答えたのが、次の歌である。

三九七三 七言、晩春三日遊覧一首〔并せて序〕

(序文省略)

大君の 命^{みこと}恐^{かしこ}み あしひきの 山^{やま}野^の障^{さや}らず 天^{あま}離^りる
鄙^{ひな}も治むる ますらをや なにか物思^{ものおも}ふ あをによ
し 奈^{なら}良^ら道^ち来^き通^とふ 玉^{たま}梓^{はこ}の 使^{つか}ひ絶^たえめや 隠^{こも}り恋
ひ 息^{いき}づき渡^{わた}り 下^{した}思^{おも}ひに 嘆^{なげ}かふ我が背^いに 古^{いにし}ゆ 言
ひ継^{つぎ}ぎ来^くらし 世の中は 数^{かず}なきものぞ 慰^{なぐさ}むる
こともあらむと 里^{さと}人の 我^{われ}に告^つぐらく 山^{やま}辺^へには
桜^{さくら}花^{はな}散^ちり かほ鳥の 間^まなくしば鳴^なく 春^{はる}の野に
すみれを摘むと 白^{しろ}たへの 袖^{そで}折^をり返^{かへ}し 紅^{べに}の 赤
裳^{しやう}裾^{すそ}引き 娘^{をとめ}子^らは 思^{おも}ひ乱^{みだ}れて 君^{きみ}待^{まち}つと うら
恋^{こひ}すなり 心^{こゝろ}ぐし いざ見^みに行^いかな ことはたなゆ
ひ

(卷十七)

池主は、まるで家持の空想の世界に入り込むかのように、こう歌っている。

家持さん、その紅の赤裳の娘子はね、真っ白な衣の袖を折って、春の野のすみれを摘んでいるのだがね、彼女たちはね、あなたに惚れ込んで惚れ込んで、思ひは乱れて……待っているんですよ。さあ、春の野に見に行きましょうよ。ちゃんと約束を守つ

下さいね。

(筆者が作成した釈義)

野遊びに行くという約束をちゃんと守って下さいよとは、早くよく
なつて下さいということと、ここでは同義となる。大伴池主は、そ
ういふ言い方で、家持を氣遣っているのである。また、そこに歌の
妙があるのだ。

若く美しい娘子、その娘子が纏う裳は赤裳でなくてはならないの
である。その赤裳のうちでも、呉の藍、すなわち「くれなゐ」の赤
裳は、舶来のおしゃれな裳だったといえよう。まさしく、美女を表
す記号のようなものである。

紅はうつろふ色

しかし、紅はうつろふ色でもあった。それは、あたかも、いかな
る美貌の人も老いさらばえるように。たとえば、こんな歌がある。

三八七七 豊後国の白水郎が歌一首

紅に 染めてし衣 雨降りて にほひはすとも う
つろはめやも (巻十六)

雨が降って、にほふとは、雨に濡れ、色が増し、色が濃く輝いて見
えることをいう。しかし、濡れてしまうと「うつろひ」も早いので
ある。つまり、退色してしまうということだ。

こういった退色を防ぐには、何度も染め直して、色を濃くしてお
く必要があった。

四一五六 鷗を潜る歌一首〔并せて短歌〕

あらたまの 年行き反り 春されば 花のみにほふ
あしひきの 山下とよみ 落ち激ち 流る辟田の

川の瀬に 鮎子さ走る 鳥つ鳥 鵜養伴なへ 簞さ
し なづさひ行けば 我妹子が 形見がてらと 紅
の 八入に染めて おこせたる 衣の裾も 通りて
濡れぬ (巻十九)

ここでいう八入染めとは、八回染めるということであり、幾度も繰
り返して染めることを表す。「しほ」とは、漬け込んだり、浸したり
する回数を数える助数詞である。美しく鮮やかであればあるほど、
人はほんの少しの退色でも、「うつろひ」を感じてしまうものなのだ。
他方、「紅」は若い愛人を象徴する色でもあった。

一三二三 紅の 深染めの衣 下に着て 上に取り着ば 言な
さむかも (巻七)

は、意味深長な歌だ。紅の深染めの衣を下に着ているのはよいが、
上に着ると噂が立つであろうというのである。紅の深染めの衣とは、
若い愛人のことである。下着のように人の目に触れなければよいが、
上着のように表に見えてしまうと、噂の的となるというのである。
次の歌も、同じ趣向である。

二八二八 譬喩

紅の 深染めの衣を 下に着ば 人の見らくに
ほひ出でむかも (巻十二)

どんなに隠していても、若い愛人がいればわかるもの。それは、紅
の深染めの衣なら、たとえ下着として着ていたとしても、見る人が
見れば、わかるのと同じ。紅の色は「にほひ」ますから、というの
である。「にほふ」とは、照り輝く美しさという言葉で、色が外に向
かって後光のように発散して見えるさまをいう言葉である。下着が
紅色ならば、透けてすぐにわかるということだろう。

では、若い愛人に対して、古女房の色はどんな色なのだろうか。それは、^{つるはみ}橡色である。越中時代の大伴家持に、困った部下がいた。男の名は、^{おわりのおくひ}尾張少昨である。この男、土地の遊女にうつつをぬかして、官舎に連れ込んでいる始末。家持は、長反歌を合わせて四首作って、少昨を教え諭したのであった。時に、天平感宝元年（七四九）五月十五日のことであった。その最後の歌、すなわち第二長歌の反歌には、

四一〇九 紅は うつろふものそ ^{つるはみ} 橡の なれにし衣に ^{きぬ} なほ
及^しかめやも

右、五月十五日に、^{かみ}守大伴宿禰家持作る。

（巻十八）

とある。紅は「うつろふ」ものですよ、橡の着慣れた衣には及ばないぞ、と。橡染めの衣とは、くぬぎを叩き潰し、煮込んだ汁で染めた衣のことである。基本的には茶褐色であるが、何度も染めることによって、黒くすることもできる。茶褐色か黒、それが古女房の色というわけだ。しかし、橡色の方が、心休まるよと、家持は諭しているのである。どんなに美しく鮮やかな紅色であつても、色褪せるのだから、橡色の着慣れた衣が一番さ、と諭すのである。

おわりに

文化的な慣習に基づき、特定の情報を発信する社会的記号。色もまた社会的記号の一つであった。そのような社会的記号を使用する万葉歌——。「あかとさき」の「あか」は、「くら（暗）し」の「くら（黒）」に対応する色だが、若い愛人を「紅」に喩えるなら、古女房

の色は「橡の色」となる。文学の色彩研究は、一筋縄ではゆかないのである。

紅の赤裳は、若くて美しい美女を表す記号だから、容姿が記述されなくても、紅の赤裳を纏う女性は、美貌の人ということになる。しかし、その美しさゆえに、紅は「うつろふ」ことを前提とした色でもあるのだ。

このシンボジウムで、私が万葉研究の立場から発信したいことは、文学が利用した、そのような色の持つ社会的記号としての一側面であった。以って、ご叱正を仰ぎたい。

参考文献

- 板橋倫行「赤裳こそ引く万葉女性たち」（『大仏造営から仏足石歌まで』せりか書房、一九七八年、初出は一九五九年）。
- 稲岡耕二「各論 十九 八〇四歌の異伝等について」（『万葉表記論』塙書房、一九七六年）。
- 伊原昭「にはふー大伴家持におけるー」（『古代文学』第八号、一九六八年）。
- 伊原昭「にはふ」と「うつろふ」とー大伴家持におけるー」（『国語と国文学』第四六巻第一二号、一九六九年）。
- 伊原昭「紅之深染」（『増補版 万葉の色ーその背景をさぐるー』笠間書院、二〇一〇年、初出は一九六五年）。
- 井村哲夫「令反或情歌と哀世間難住歌」（『憶良と虫麻呂』桜楓社、一九七三年、初出は一九六八年）。
- 片岡智子「歌語「くれなゐ」考ー紅は移ろうものかー」（『ノートルダム清心女子大学紀要 国語・国文学編』第一八巻第一号、一九九四年）。
- 坂本信幸「河内の大橋を独り去く娘子を見る歌」について」（『大谷女子大国文』第二八号、一九九八年）。
- 佐竹昭広「古代日本語における色名の性格」（『萬葉集抜書』岩波書店、一九八六年、初版一九八〇年、初出は一九五五年）。
- 佐竹昭広「語彙の構造と思考の形態」（『萬葉集抜書』岩波書店、一九八六年、初版一九八〇年、初出は一九五六年）。

鉄野昌弘「転換期の家持―『臥病』の作をめぐる―」（『大伴家持「歌日記」論考』塙書房、二〇〇七年、初出は一九九〇年）。

中西進「くれない―家持の幻覚―」（『万葉史の研究（下）（中西進 万葉論集 第五卷）』講談社、一九九六年、初出は一九六七年）。

西一夫「天平十九年春の家持と池主の贈答―『臥病』作品群の形成―」（『萬葉』第一七四号、二〇〇〇年）。

森斌「高橋虫麻呂試論―河内の大橋の娘子歌について―」（『広島女学院大学論集』第四一号、一九九一年）。

付記

一 本稿は、彷徨五年を経て、『鹿園雜集』において、ようやく活字化された。本来ならば、奈良国立博物館編『正倉院宝物に学ぶ 第五卷』（思文閣出版）に入る予定であったが、本シリーズは出版事情の悪化から、第四巻で打ち切りとなってしまったのである。原稿依頼を受けての執筆であったので、すでに原稿提出していた執筆陣の憤懣と落胆は尋常なものではなかった。この度、善後策を模索された井上洋一、内藤栄、清水健、三本周作の四先生のご周旋によって、ようやく本稿は日の目を見たのである。多謝、感謝である。

二 本稿は、二〇一六年秋の正倉院学術シンポジウムの口頭報告を骨子として成稿。すでに、二〇一七年一月には、受理されていた。文章は、前記のシリーズ本の分担執筆した稿なので、その執筆要項に従って執筆されている。当然、内容も単行本向けに書かれている。『鹿園雜集』といえ、斯界を代表する紀要であり、しっかりとした学術論文でなくてはならないはずだ。しかし、今の筆者には、その時間的余裕もない。紀要論集としては、異例の文体となっているのは、そのためである。ご寛恕を乞う次第である。

なお、二〇一七年一月以来、筆者は、本稿の活字化を渴望しつつ、次の二稿の関係論考をものしている。ご併読たまわれば、幸甚この上ない。「裳をめぐる万葉歌表現―裳のいろいろ（前）―」（『早稲田大学日本古典籍研究所年報』第十一号、早稲田大学総合研究機構日本古典籍研究所、二〇一八年三月二十一日）

「『紅の赤裳』という表現―裳のいろいろ（後）―」（『美夫君志』第九十七号、美夫君志会、二〇一八年十月二十日）

図版解説（口絵5・6参照）

「褐色絹裳」「綾縹縹純間縫裳」

正倉院宝物のなかには、裳裙にあたるものが保存されている。「白橡純袴裳」「褐色絹裳」「綾縹縹純間縫裳」「紫綾袴裳」「呉公前裳」「布前裳」などである。このうち、鮮やかな色で万葉歌において「赤裳」「玉裳」と称し得るものは「褐色絹裳」「綾縹縹純間縫裳」であろう。「褐色絹裳」は、上下別々の裂を縫いで作られた裳である。上部は白糸を横長に用いて、十条の襷をつけている。下部の褐色部は平絹で三十条の細い襷がついている。上部の白と下部の赤がコントラストをなした裳である。上部の襷が荒く、下部の襷が細いので、着用した場合、下部の方が開いて膨らんだように見えるだろう。歩けば、下部の方が襷が多い分、ゆらめいて見えるように仕立てられているはずである。しかも単衣仕立てなので、なおさらひらひらと、ひらめくはずである。

「綾縹縹純間縫裳」は、天寿国繡帳（中宮寺蔵）、高松塚古墳壁画（奈良県明日香村）、絵因果経、吉祥天女画像（薬師寺蔵）などを彷彿とさせる縦縹のものである。赤地縹縹純、紫綾、緑系織色綾の三種の細長い布を繰り返して、縦縹をなしている。赤、紫、緑の縦縹が鮮やかである。着用すれば、縦縹のため下半身が丈長く見えることであろう。

（うえの まこと／國學院大學教授（特別専任））

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第二十五号

令和五年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8223

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地